

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	『台湾愛国婦人』編集者・加納豊の台湾以前／以後：『芦田均日記』を補助線に
Author(s)	下岡, 友加
Citation	国文学攷, 251 : 17 - 31
Issue Date	2021-12-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052811">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052811</a>
Right	Copyright (c) 2021 by Author
Relation	



# 『台湾愛国婦人』編集者・加納豊の台湾以前／以後

——『芹田均日記』を補助線に——

## 下 岡 友 加

はじめに

愛国婦人会台湾支部機関誌『台湾愛国婦人』は、一九〇八年一〇月二二日に『愛国婦人会台湾支部報』として創刊された。〈帝國〉日本が〈外地〉で発行した、初めての女性雑誌である。翌年一月よりタイトルを『台湾愛国婦人』に改め、月刊雑誌となった。<sup>1</sup>一九一六年三月の廃刊に至るまで全八八巻が刊行され、最も多い年（一九一四年）で年間八六一七五部が台湾島内に配布されている。<sup>2</sup> 発刊から二年後の一九一〇年時には広告を含めて三百頁近くの分量を備え、終刊までその形態が維持された。毎号異なる着色絵入表紙を擁し、日本文のみならず、漢文欄も設ける。日本統治初期の台湾において相当な資金と人力をつぎ込んだメディアであった。

愛国婦人会台湾支部主事（台湾総督府財務局税務課課長）の高山仰は創刊号「発刊の辞」において「本島の情勢は内地と其の類を異

にし東半部の峻山に蟠踞する兇蛮は未だ全く王化に潤はず」「討伐に殉じたる死者を弔ひ傷者を勞り其の遺族を救護するは戦時の軍人夫れと決して甲乙あるべからず」<sup>3</sup>と述べ、当時の総督府最大の懸案事業「山地討伐」の後方支援に努めるよう、「本島在住婦人」に訴えた。このように台湾総督府の統治初期政策履行の広告塔としての役割が、『台湾愛国婦人』には課せられていた。〈内地〉の『愛国婦人』（一九〇二年三月～一九四二年二月）とは別に発刊され、かつ雑誌の刊行期間が「理蕃五箇年計画」とほぼ重なっているのはそれゆえである。<sup>4</sup>

しかし、本誌の性格をただに官製プロパガンダ誌と了解するには割り切れない要素も存する。それは第26巻（一九一・一）以降頭著になっていく、〈内地〉著名作家の寄稿に支えられた文芸総合雑誌としての貌である。さらに刊行最終期においては、在台日本人の手になる台湾表象を含む文学作品が複数掲載されている点でも注目

に値する。一般的には、「近代文学はまだ在台灣日本人の間ではほとんど行われなかった」(松永正義<sup>53</sup>)と位置づけられている時期における文学テクストの出現であった。すなわち、同誌は「外地」の「文化的基盤」(「日比嘉高」<sup>54</sup>)としての側面も持つ。果たして、このように複合的な性格を持つ媒体を具体的には誰がどのようにして編んだのか。

本稿は、如上の問題を考えるため、同誌編集者・加納豊(筆名…告天子、抱夢、紫峰生)に着目する。加納は後述する通り、台湾「山地討伐」に関わるプロパガンダ記事を担う一方、「内地」文壇にも通じた人物であり、自ら長編小説を寄稿するなど、作家としての技量も持ち合わせていた。つまり、この媒体の複合的な性格のまさに要となった人物と考えられる。ただし、加納に関する情報は極めて少ないため、ここでは彼の履歴や人柄について台湾総督府文書や加納の中学時代の同窓・芦田均が残した『芦田均日記』等をもとに、その像に迫ることとしたい。

## 一 加納豊の履歴

加納豊は愛国婦人会台湾支部嘱託職員(後事務員。一九〇八年九月〜一九一六年二月)並びに台湾総督府財務局稅務課職員(一九〇九年一月〜一九一三年七月)として雇用されている。<sup>57</sup> すなわち、「雑誌代表者(奥付記載)」である高山仰(愛国婦人会台湾支部主事・

台湾総督府財務局稅務課長)の部下にあたる。高山が一九一六年一月より新竹庁長に栄転したため、その後に行われた『台湾愛国婦人』第86、87、88巻の奥付には高山の代わりに「発行兼編輯人」として加納の名が記された。同誌「廃刊届」も加納が提出している。<sup>58</sup> また、第79巻(一九一五・六)の「読者大会の記」には台北で開催された雑誌読者大会の不幸際を「抱夢庵主人」が主催者としてわびる記事(一三七頁)や「編輯主任の加納抱夢君」が開会の辞を述べたという見聞記(塘翠子(西岡英夫)執筆、一三八頁)がある。第81巻(一九一五・八)にも再び英塘翠(西岡英夫)から「加納編輯主任」への謝辞(二二五頁)が見られること等から、加納を本誌の実質的な編集責任者(特に雑誌刊行後半期において)と見てまず間違いないと考える。

総督府に提出された加納の履歴書(「加納豊任総督府属」一九〇八年二月二五日「明治四十二年永久保存進退(判)第一巻」《台湾総督府檔案》国史館台湾文献館、典藏号00001553002参照)には次のようにある。

### 学歴

- 一九〇四(明治37)年三月 兵庫県立柏原中学校卒業
- 一九〇六(明治39)年四月 早稲田大学入学
- 一九〇七(明治40)年七月 早稲田大学高等予科卒業

一九〇七（明治40）年九月 早稲田大学英文科（大学部）入学  
一九〇八（明治41）年六月 早稲田大学英文科二年に編入

#### 職歴

一九〇六（明治39）年二月～一九〇七（明治40）年八月 『学生タイムス』編集に従事

一九〇八（明治41）年一月～二月 『中学世界』に「学生論客月旦」を連載

一九〇八（明治41）年五月 家庭雑誌社入社。同誌編集に従事

加納は一八八五年二月生まれ、本籍地は「兵庫県水上郡柏原町西町一八番邸」、現住所は「東京市小石川区江戸川町一番地秋田方土族」と記されている。民政長官大島久満次宛の加納の台湾「到着届」は一九〇九年一月一日付で提出されており、渡台時には二五歳（数え）であった。愛国婦人会台湾支部囑託職員としての加納の雇用が一九〇八年九月に遡ることからすれば、加納は〈内地〉において創刊号（一九〇八・二〇、名称は『愛国婦人会台湾支部報』の編集に既に関わっていたと見られる。しかし、『台湾愛国婦人』が翌一九〇九年一月から月刊雑誌として本格的に始動することになったため、総督府職員という身分（給与）と引き換えに現地で腕を振るうべく加納は台湾へ渡ったものと考えられる。

加納が〈外地〉の女性雑誌に召喚された一因としては、履歴の通り、

台湾へ渡る直前まで『家庭雑誌』<sup>9)</sup>という家庭・女性読者向けの雑誌編集に実際に従事していたことがまずあげられよう。さらに、加納が博文館との関わりを持っていた点が重要である。加納が博文館発行の『中学世界』へ寄稿していた時期は、ちょうど巖谷小波が編集を行っていた期間（一九〇五年六月～一九一〇年一月）にあたるが、<sup>10)</sup>『台湾愛国婦人』にはこの小波の他、江見水蔭、前田曙山、石橋思案、川上眉山、泉鏡花、徳田秋声、広津柳浪、押川春浪等、博文館に関わりの深い硯友社系列の作家たち、並びに博文館理事・坪谷水哉の寄稿が多く見られる。<sup>11)</sup>誌面上の構成においても、画報の形式やキャプションの付け方、カットの配置は同時期の博文館の諸雑誌と類似し、新年号に雑誌の編集職員の個人名が連名で記載される点も博文館の通例に準じる。<sup>12)</sup>『台湾愛国婦人』には、明治期最大の出版社である博文館の人脈とスキルが少なからず投入されていると見なされ、加納の採用もその筋による推挽であった可能性が高い。

なお、加納の旧姓は武田である。時代がかなり下るが、一九六七年三月発行の「柏原高等学校同窓会会員名簿」「第三回卒業生（37名・明治三十七年卒業）」「死亡者」欄の「加納豊（旧姓武田）」の記述等からその事実は確認される。<sup>13)</sup>また、加納が一九〇八年一月下旬頃、加納家の養子に入ったことは、第四七代内閣総理大臣をつとめた芦田均（一八八七―一九五九）の日記の記述からうかがうことができ

る。芦田は加納より二歳年少ではあるものの、卒業年度を同じくする柏原中学校時代からの友人であった。次節以降では『芦田均日記』の記述を補助線に、加納の履歴や人柄についてより詳しく確認していく。

## 二 『芦田均日記』からみる加納豊―渡台前

『芦田均日記』とは芦田が第一高等学校に入学した翌年（一九〇五年）からつけられ始め、亡くなる年（一九五九年）まで五〇年以上に渡って記された「貴重な近現代史の証言であり、記録」（福永文夫）<sup>14</sup>とされる資料である。加納豊に関する記述は福永文夫・下河辺元春編『芦田均日記』全五巻（柏書房、二〇一二・三）のうち、第一巻（一九〇五―一九一一年の日記）に集中しているため、以下の記述では当巻を『日記』と略記する。芦田と加納の間では一九〇五年一月一日以降、頻繁に書簡のやりとりが確認されるが、実際に二人が行動をともにした記録としては、同年一〇月の「武田君」としての登場が最初である。

一九〇五年一〇月二日 六時頃起きる。今日又ボートに行く筈なれど、武田君来訪の筈なれば止めぬ。武田君来る。明年四月に早大の文科に入る考なりといふ。共に上野に散歩し、白馬会をみる。帰って、夕食を共にして、又梅月へ行く。『日記』

一〇一頁より抜粋。傍線は下岡が付した。以下、同様

右引用傍線部は前節で確認した加納の「一九〇六年四月 早稲田大学入学」という履歴書の記載と合致する。さらに、一九〇六年一月三日の『日記』には「武田君ハ先日から牛込へ越した」（二三六頁）とあり、同年五月八日には「武田君を訪ふて一寸話す。やはり武田とハ昔馴染で面白い。養子の事を考へ中だといつた」（『日記』一八八頁）との記述も見える。その後、一九〇七年九月二十九日に「武田兄来訪、愈養子に行くこと定めたりといふ。これもよからう」（『日記』三七六頁）とあり、加納の養子行きが決定したことがわかる。『日記』において武田という姓は一九〇八年一月一五日を最後の使用とし、同月二七日からは新たに加納姓が用いられている。この間に加納家への入籍が行われたものと見なされる。さらに二ヶ月後の一九〇八年三月二日には「加納君の妻君上京」（『日記』四四五頁）とあり、三日後の二五日には「会了つて加納君を訪ふ。妻君にも会つた」（『日記』四四六頁）と記されている。加納は台湾へ渡る約一年前に養子に入った上、結婚していることがわかる。加納の人柄について芦田は「武田君ハ件の詩人肌で相不変悶々して居るらしい」（一九〇七年七月二〇日、『日記』三四九頁）と記したり、<sup>15</sup>次のように加納の「情」に敬意を表したりしている。

一九〇六年一月三〇日【為したる事】◎吾友五あり、武田君、長瀬、河上、田辺、児玉の諸兄なり◎

長瀬無腸、智に於て吾之に服し、河上春風、吾、才に於て之に服し、田辺秋水、吾、意の強きに於て之に服し、武田夕映、吾情に於て之に服し、智情意、円満具足せるもの、児玉兄を以て之を推す。〔日記〕二四一頁

芦田の記す情感豊かな加納の「詩人肌」については、『家庭雑誌』編集時代から用いられている「抱夢」という筆名やその時代から確認できる小説等の内容からも領ける。<sup>95</sup>ともに文学青年であった二人の間では、芦田が加納に「独歩集と、花袋や藤村の作を借り」（一九〇七年一月二三日、『日記』三九八頁）たり、「水彩画家の主人公が感ずる様な煩悶は吾々の同情をひく。自然主義者のいふが如き半獣主義ハ感じがよくない。武田に大に吹いてやつた」（一九〇七年一月二五日、『日記』三九九頁）といった談義がなされたりしている。

さらに、芦田は一高における夏目漱石の教え子であり、その小説の愛読者でもあった。「八時半帰つた。それから夏目先生の書かれた「倫敦塔」を写した。これは言文一致で中々の名文である」（一九〇五年二月一〇日、『日記』二二二頁、「夏目（漱石）さんの「吾輩は猫である」をホト、ギスで読んだ。無名の猫の述懐と観察とを

描いたもので前後六〇頁も居る」（一九〇五年二月一四日、『日記』二三頁）等、『日記』には多くの漱石関連の記述がある。芦田は漱石の雑誌掲載作品を集めて自前の「漱石文輯」を作成し、漱石本人に直接題字を書いてもらっている（「午后湯に入り、夏目先生を訪ひ、漱石文輯の題字を書いてもらひしを取りに行く。「釣鐘のうなる許りに野分哉」と書いてある、文輯ハこれで二巻である」一九〇七年一月二七日、『日記』二八一頁）。

稿者は別稿にて、加納の執筆した小説「夢」（『台湾愛国婦人』一九一五年五月〜十二月）と漱石の小説との間テキスト性を指摘したことがあるが、<sup>96</sup>この芦田という友人の存在を踏まえれば、加納にとって漱石はただに同時代の著名作家というだけでなく、親友の直接交流し、敬愛する師でもあったことになる。加納の「夢」における漱石テキストの模倣と変奏は、そうした特別な親しみの上に試みられたものと、執筆の背景について新たに理解し直すことも可能であらう。

その他、『日記』からは複数の雑誌編集に携わっていた加納が芦田に原稿の依頼をしたり、相談を行っている様子が見られる。

・一九〇七年一月三〇日 夜ハノートを訂正したりしていると  
武田君 came 話して帰ると九時。（…）何だか原稿を書いて  
| くれいといふ武田君の要求だつた。〔日記〕三八八頁

・一九〇七年二月二日 午后、武田君原稿の用向にて来る。中学世界に筆とる事となれりといふ。『日記』四〇六頁

・一九〇八年一月一日 帰りに夕食、武田君来る。原稿の事等話して帰る。『日記』四二四—四二五頁

・一九〇八年九月一六日 朝図書館で、加納君より頼まれた家庭雑誌の原稿をかく。(…) 帰りに加納君を訪ふ。『日記』四九五頁

・一九〇八年一月二五日 夜加納豊君来訪。新渡戸先生に関する原稿の事に関してなり。話して散歩す。／練兵場から一丁目の方へ行く途中道々で話す。彼と僕は何事も隔てなく話す。僕の仕事ハ彼か最もよく知つて居るだらう。『日記』五一六頁

右引用三つ目(一九〇八年一月一五日)は、時期的に見て加納が『中学世界』に寄せた記事「学生論客月旦(其三) 芦田均君(帝大)」(一九〇八年三月一〇日。筆名・紫峰生)に関する相談と考えられる。記事において加納は芦田について「高潔なる人格と真摯なる性情とを兼ね備へ、学ぶべきに学び、遊ぶべきに遊び、言ふべきにいふ、芦田均君の如きは、真に学生諸君が模範たるに庶幾ちかからずや」と読者に紹介している。「思想家的性情と、政治家的特質との相混ざる頗る矛盾せる性格を有す」「多数輿論の指導者たるよりは寧ろ少数党として侃諤の弁を好むが如し」といった、のちの芦田の姿を髣髴

とさせるような評価も見え、二人の関係の近しさを感じさせる。

一高を主席で卒業し、帝国大学でも著名な論客として才を発揮する芦田に対し、加納は自己を犠牲にしても芦田の学資を優先することを伝える手紙も送っている(「帰つて見ると武田君より来信。罷り違へハ自己が学校を止めても学資ハ君の方へ送るとある。実に何とも云へぬ気になる一九〇七年二月二九日、『日記』四一三頁)。このような加納と芦田のいわば「密月」は、加納の結婚後も「午前、麹町に加納君を訪ふ。久しく待つて漸く帰り来る。午后同君来る。話す。曰、已に女に飽けり。曰、友ハ男子の間にのみうれしきものなり」(一九〇八年七月八日、『日記』四七二頁)というかたちで続く。

### 三 『芦田均日記』からみる加納豊—渡台後

結婚後、一年足らずで渡台した加納に対し、芦田は「台湾の加納君を思ふ。僕の事を最もよく知つてるものは彼！彼を最もよく知るものハ僕！あ、彼、健在なれ!!」(一九〇九年二月一日、『日記』五四三頁)と特別な親しみを込めた思いを書きつけている。それから四ヶ月後に加納は一児の父となり、芦田はその名付け親となった。

一九〇九年六月七日 加納君、台北にて男子をあぐ。僕の命名して見といふ。大きくなつたら外交官にするといった。親といふものはそんなに子の可愛いものかしら!『日記』

加納は『台湾愛国婦人』第25巻「婦人倶楽部」欄(二九一〇・一二、一〇〇頁)に「老婦が赤ン坊に卑俗い俚語を教へて居る」(筆名・告天子)と記しており、上の情報とも照応する。間もなく子どもが生まれるという経済事情も、学業の途中で加納が台湾へ渡った大きな動機であったと推察される。その後の『日記』からは家庭人たる加納に対し、独身の芦田が価値観の隔たりを感じつつ、しかし以前と同様に二人が互いに激励し合う仲であり続けた様子が確認できる。

・一九〇九年七月一四日 加納君から来状。友人といふものは皆うれしいものである。近状を詳しく報道した。婚姻したるものは僕等とハ全く異なる半面に住む。婚姻といふ事実ハ、人生の半面を変色せしめるらしい。(『日記』五九六頁)

・一九〇九年七月二九日 朝ハーモニカを吹いて居ると手紙が来た。加納君の手紙に「小さい迷に囚はれるな、君の全的存在をうち込んで少しも間隙のない生活に入れ：僕も君のお陰で今日迄向上の念を失はない事を謝する…」とある。嬉しくよんだ。(『日記』六〇二頁)

・一九〇九年八月一九日 加納君から家族の写真が来た。可愛

らしい子である。それでも羨しいといふ気ハ少しも起らなかつた。寧ろ家庭等を思ふと心か暗くなるばかりである。(『日記』六一一頁)

・一九〇九年一月一九日 加納君から来信。弱くてはいけないと懇々と書いてあつた。(『日記』六四三頁)

その他、加納の渡台後の動向を知るに重要な『日記』の記述として次の二点をあげたい。一つは、芦田が島崎藤村のフランス行きに関与しているという点である。一九一三年三月一二、一三、一四、一七日の『芦田均日記』第二巻(二一五、二一七頁)の信書欄には立て続けに藤村の名が記されており、「島崎藤村邸から旅券の用事で手紙が来た。すぐ返事を書いて出した」(三月二二日)と、芦田が藤村の渡欧手続き上の補佐を行っていることがわかる。芦田は大学在学中の一九一一年九月に外交官及び領事館試験に合格し、翌一九一二年八月に外務省へ入省していた。いよいよ旅立つ藤村を芦田は新橋駅まで見送りにも出かけている(一九一三年三月二五日『芦田均日記』第二巻、二二一頁)。

加納の小説「夢」にはまさに藤村を思わせる著名な小説家のフランス行き・新橋出立の様子が描かれているが、この小説中の場面には既に台湾に渡っていた加納ではなく、芦田の見聞が生かされている可能性がある。『日記』にも記されていた通り、藤村の著作を貸

し借りするような二人の間柄からして、藤村との接触が芦田から加納に全く伝えられなかったとする方がむしろ不自然であろう。

さらに、渡台後の加納の動向を知るに重要な、もう一つの『日記』情報が次である。

一九一〇年四月一九日 加納君の手紙には近い中には必ず一仕事やつて見せる、安心してくれと勇んだ事が書いてある。近々生蕃討伐隊に従軍記者として行くつもりだとある。(『日記』七―四頁)

ここで「従軍記者」を志望する加納の脳裏には、日清戦争或いは日露戦争に従軍した子規や国木田独歩、田山花袋の例があったと考えられる。芦田の日記からは加納が文学青年であるとともに、「勇んだ」青雲の志をも持つ青年であったことも知れる。右の『日記』の時期からはかなり下るが実際に、加納は『台湾愛国婦人』第68巻(71巻(一九一四・七―一〇)へ全一―二頁に及ぶ大部の報告文「太魯閣蕃討伐記」を寄せた。<sup>20)</sup>

加納が執筆した「太魯閣蕃討伐記」には文学的要素は皆無である。陸軍及び警察隊の「討伐隊幹部」全員の氏名を記し、一九一四年五月一六日に下された佐久間左馬太総督の「討伐軍命令」をほぼそのままに掲げるなど、事実の報告を主眼とした「討伐」記録となって

いる。のちに「理蕃五箇年計画」の実施内容は総督府警察局により『理蕃誌稿』第三編(上下巻、一九二・三)にまとめられるが、加納の文章はそのかなり早い報告文の一つと言えよう。「太魯閣蕃討伐記」冒頭の「一、出師の理由」には次のようにある。

台湾全島の蕃族凡十二万、多くは政令に服し、皇化に嚮へるも、独りタイヤルと称する一族の嶮に拠つて兇暴を恣にするあり。事一国の存亡に関せずとは云ひ乍ら、苟も我皇の稜威を潰すに於て、断じて其跳梁に委すべからず。況んや彼等が奄有せる広漠の地域は夙に無尽の宝库を以て目せらる、をや。台湾総督府、乃ち曩に理蕃五箇年計画を樹て、帰化の蕃族を撫育すると共に、之等不逞の兇蕃を征服すべく、宜蘭新竹桃園台中南投各方面の隘線を進め過去四年すでに其目的の大部分を達成し、今や太魯閣蕃と一二の小蕃を剩すのみとなれり。是等蕃族を掃蕩し尽せば全島理蕃の事業茲に始めて全し。(『台湾愛国婦人』第68巻、一九一四・七、附録三頁)

まさに「植民地支配は本国資本主義の被植民者経済に対する資本主義化であり、困い込み」(小島麗逸)<sup>21)</sup>に他ならないことが加納の文章にも明白である。加納は「無尽の宝库」を得るべく「理蕃」完遂の必要性を説き、プロバガンダ誌編集者としての任を果たした。

稿者はかつて華族夫人の悪徳を描いた加納の小説「夢」を「愛国婦人会という組織の機関誌掲載小説としてはむしろ不適切とも言うべき内容」とし、「媒体に課せられた政治性ではなく、通俗性や娯楽性に重きを置く本テキストを掲げて雑誌の多声性を担保した」と評価した。<sup>22</sup>『台湾愛国婦人』における「夢」というテキストの機能の説明としては誤りではないと考える。しかし、ここで書き手である加納の立場に寄り添って事態を眺めるならば、小説「夢」の掲載よりも先に、当時の総督府最大の懸案事業である「理蕃五箇年計画」の掉尾を飾る戦いを報告する記事を四ヶ月に渡って同誌に掲げたという彼の働きについても考慮すべきであった。すなわち、加納は決して同誌の自分を忘れてはおらず、「夢」の掲載は、加納が雑誌に求められていた役割を既に十分に果たしたがゆえに許された行爲だったと把握することができるのである。

さらに踏み込んで推測するならば、第20卷（一九一〇・七）からほぼ毎巻のように『台湾愛国婦人』に掲載され、「理蕃」の実況中継を行ってきた無署名の記事「討蕃彙報」「蕃界彙報」（或いは「北勢蕃討伐彙報」）の執筆者（の一人）が加納であったという可能性も否定できない。推測の根拠は次の三点である。第一に、第20卷以降「太魯閣蕃討伐記」が書かれるまでの期間における加納の創作は第30卷の「上靴の王妃」（翻案お伽劇）のわずか一編にとどまっていること、第二に、第26卷（一九一一・一）正月号の附録「討蕃双

六」に説明文を付したのが加納であること、第三に先に確認した通り、一九一〇年四月の時点で加納が「従軍記者」としての予定を芦田に知らせ、その意気込みを伝えていることである。

無論、編集部には他にも要員があり、加納一人がすべての「理蕃」関係記事を担当していたとは記事の全体量からしても考えにくい。が、「理蕃五箇年計画」の最終局面を伝える「太魯閣蕃討伐記」のような文章を付け焼き刃の知識で執筆することもまた不可能である。編集者・加納がこの記事以前にも同誌刊行の主たる目的である「理蕃」報道において少なからぬ役割を担っていたと考えるのが至当であろう。

プロバガンダ記事をしたためる一方、プロバガンダとはほど遠い文学テキストを寄稿する加納のふるまいは不可解ではある。しかし、芦田が書き残した加納の動向からすれば、加納自身のなかではそれほど矛盾なく両者は共存していたようにも見える。従軍記者を志望する青雲の志を持つ青年と、情感豊かな「詩人肌」の文学青年との共存である。無論、加納の本音はわからない。が、〈帝国〉として台湾での植民地運営を開始した日本は、明治末から大正期にかけての同時期に充実した文学場を築いてもいた。<sup>23</sup>加納の在り方、ひいては彼が編集する雑誌の複合的性格とは、同時代日本の様相を端的に象徴する一例として把握することもできるのではないだろうか。

## おわりに

加納は一九一三年七月、病気を理由に総督府職員を退官している。公文書には次のように記されている。

神経衰弱兼麻刺里亜二權り職二堪へザルヲ以テ辭職ヲ願出タル  
財務局稅務課勤務台灣總督府屬加納豊二昇級ノ上事務格別勲励  
二付一時金ヲ賞与シ依願本官ヲ免シ退官一時金ヲ給ス（屬加  
納豊（昇給・賞与・免本官・退官・賜金）一九一三年七月一  
日〈大正二年永久保存進退（判）第七卷甲〉《台灣總督府檔案》  
国史館台灣文獻館、典藏号 00002192030）

しかし、加納は総督府退官後も愛国婦人会台湾支部事務員職を解かれておらず、雇用は『台湾愛国婦人』刊行終了時まで続いた。<sup>24)</sup>高山仰の栄転後、「発行兼編輯人」の肩書きを担った加納であるが、それからわずか三ヶ月で雑誌は廃刊となる。既に「理蕃五箇年計画」は終了し、愛国婦人会台湾支部会員も大幅に増加した中、巨額の赤字を押しついで総督府が同誌を継続・運営する意味はもはや失われていた。<sup>25)</sup>雑誌の消長はやはり官製婦人団体プロパガンダ誌という性格によって決定付けられたのであり、雇われ編集者である加納がそれに抗うことは不可能であった。

『台湾愛国婦人』の廃刊と同時に愛国婦人会台湾支部を解職となった加納豊は、翌月には台湾日日新報社に記者として入社している（一九一六年三月一日付『台湾日日新報』第二面参照）が、その後の足取りの詳細は不明である。昭和初期にまで下るが、一九二八年一〇月一〇日東京で開かれた柏原中学校同窓会（東京支部）に加納は出席しており、同窓会名簿の住所も「東京市外巢鴨町一二五〇」とある。<sup>26)</sup>遅くともこの時期には加納は〈内地〉に戻っていることは判明している。<sup>27)</sup>

なお、柏原中学校同窓会に関する資料を複数入手されている柏原高等学校元教諭の荒木謙氏の教示によれば、加納は一九三二年七月八日に没したとの記録があるという。<sup>28)</sup>

芦田の『日記』では、一九二一年一月一六日の【信書】欄に「加納君」（『日記』九八四頁）と記されているのが加納に関する最後の記録である。ただし、その三年後の『台湾愛国婦人』第73巻（一九一四・一二）には芦田均の評論「家庭の人に」が掲載されていることから、加納とのやりとりはしばらくは続いていたと考えられる。加納が亡くなったとされる一九三二年、芦田は外交官を辞して政治家に転身した。その芦田が名付け親となった、台北生まれの加納の息子・晃氏は一九四〇年二月六日東京で没し、<sup>29)</sup>父の故郷である柏原町の明頭寺に葬られている。

本稿では『台湾愛国婦人』編集の中核を担い、同誌の性格を形成

した一因と考えられる人物・加納豊の履歴や人物像を台湾総督府文書や『芦田均日記』等をもとに可能な範囲で明らかにした。今後は加納豊と関わりがあると考えられる同誌女性記者・加納ユカシヤ〈内地〉在住記者も含めた調査を行い<sup>30)</sup>、日本〈帝国〉史研究、台湾史研究、植民地研究、日本文学研究、女性史研究、メディア史研究等に交差する『台湾愛国婦人』という媒体を成り立たせたものについて、さらなる追究を行いたい。

注 文献の引用にあたっては旧字は新字に改め、ルビは適宜省略した。

- (1) 大橋捨三郎『愛国婦人会台湾本部沿革誌』(愛国婦人会台湾本部 一九四一・二) 一四六頁参照
- (2) 台湾総督府官房統計課『台湾総督府第13統計書』第20統計書(一九一・二)一九一七・一) 参照
- (3) 創刊号未発見のため、大橋、前掲書(注1に同じ)、一四六〜一四七頁より引用。なお、本誌の基本的性格については、拙稿「雑誌『台湾愛国婦人』の性格」プロバガンダ、そして近代文学発生史の場として(『県立広島大学人間文化学部紀要』第五号、二〇一〇・三)、上田正行「台湾愛国婦人」という雑誌の意義」(『台湾愛国婦人』の研究 本文翻刻篇) 國學院大学、二〇一四・二) 等参照。雑誌は長く稀覯本であったが、二〇一八年奥州市立斎藤實記念館蔵書発見をうけ、二〇一九年七月より京都・三人社から復刻版が刊行中である。
- (4) 河原功『台湾愛国婦人』が報じる台湾原住民」(『台湾愛国婦人 復刻版別冊 解題・総目次・執筆者索引』三人社、二〇二〇・二) は『台湾愛国婦人』は、台湾総督府の「理蕃政策」を最も詳細に伝える雑誌として

の史料価値が極めて高い(五〇頁)と指摘している。

- (5) 松永正義「台湾の文学活動」(岩波講座近代日本と植民地 文化のなかの植民地) 岩波書店、一九九三・二) 二二四頁
- (6) 日比嘉高「ジャパニーズ・アメリカ 移民文学・出版文化・収容所」(新曜社、二〇一四・二) 一七頁
- (7) 大橋、前掲書(注1に同じ) 七三二頁、並びに『台湾総督府文官職員録』台湾日日新報社、一九〇九〜一九一三年参照
- (8) 「第三種郵便物廃刊」(一九一六年三月三十一日) 大正五年三月台湾総督府報第九八一期『台湾総督府(官)報』国史館台湾文献館 典藏号 007110209812012 参照
- (9) 『家庭雑誌』(主幹・和田勝彌 家庭雑誌社) 創刊号の「発刊の辞」(和田勝彌執筆、一九〇八・五) には「現代社会に於ける家庭啓蒙の問題は、実際の生活の方面と、精神的生活の方面より解決せざるべからず。わが『家庭雑誌』はこの使命を以て生る。一は実際の社会生活の方面より家庭の指南者たり、一は清純なる靈的方面より家庭の慰安者たらむとす」(二頁) と刊行目的が記されている。
- (10) 山本昌一「中学世界」(日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典 第五巻』講談社、一九七七・二) 二六七頁参照
- (11) 第63巻(一九一四・二)の巻頭画報のなかには「本誌の為常に多大の同情を寄せらる、水哉坪谷善四郎君」というキャプションを付した坪谷の写真も掲載されている。
- (12) 博文館では「館主、副館主、局長、支配人と別格に、上段は編集局、下欄には営業部員が連名の、一ページ大の年賀広告がでることが、ずっと明治時代からの古例であった」(南部巨国『回想の博文館』日本古書通信社、一九七三・二、六八〜六九頁) とされる。『台湾愛国婦人』第14巻(一九一〇・一)、第26巻(一九一・二)、第38巻(一九二二・二)、第50巻

(11) 二九一三・(12) 同様の職員連名年賀広告があり、加納豊の名が確認できる。第2巻(二九〇九・1)は奥付頁上段に記載があるものの、加納の名はない。また、第62巻、第72巻、第86巻の新年号では、職員一同とし、職員の名は記されなくなった。

(13) 同記載については柏陵同窓会事務局・荻野朋子氏の教示による。

(14) 福永文夫「解題(序)」(福永文夫・下河辺元春編『芦田均日記』第五巻、1 1頁、二〇二二・三) 五頁

(15) その他にも、結婚に至るまで加納が度々「煩悶」している様子が芦田の『日記』には書き留められている。「武田君来る。件のラムール一件で煩悶してらしい。一切打あけてくれた」(二九〇六年六月二五日、『日記』二〇七頁)、「武田君に遇ふ。同道帰る。例の方にて煩悶し居る模様也」(一九〇七年七月二九日、『日記』三三二頁)と、加納が当時流行の「煩悶青年」であった様子がうかがえる。

(16) たとえば、『家庭雑誌』掲載の小説「踏絵」(二九〇八・七)では郷里に残した女性が手紙をよこさないことを裏切りとして煩悶する青年の様子が描かれ、小説「弱き人」(二九〇八・九)でも、上京していた青年が養家の意に反して「愛の前には凡てが降服するのだ」と新妻と老母のいる故郷へと戻る姿が描かれている。

(17) 拙稿「『虞美人草』の先へー『台湾愛国婦人』掲載・加納抱夢「夢」の表象」(『日本近代文学』第二〇三集、二〇二〇・二)

(18) 周知の通り、芦田には多くの著作物があり、彼はジャーナリストとしても活躍した。進藤栄一「解題―日記と人と生涯」(『芦田均日記』第一巻、岩波書店、一九八六・一)は、芦田は「昭和八年一月、本会議での処女演説で事実上の軍部外交批判を行なって以来、『危険人物』として軍の黒表に載せられて」(三頁)おり、「軍国主義に抗して孤塁を守り続けた議会主義者」(三五頁)であったと位置づけている。

(19) 「夢」第五章(第六章)。なお、『台湾愛国婦人』第63巻(一九一四・二)には藤村「或る男の話」という小説の掲載がある。

(20) 目次には署名がないが、「はしがき」(68巻)に「愛国婦人会台湾支部編 集局にて 抱夢庵主人しるす」と記されている。

(21) 小島麗逸「日本帝国主義の台湾山地支配 霧社蜂起事件まで」(戴國輝編著『台湾霧社蜂起事件―研究と資料』社会思想社、一九八一・六) 四七頁

(22) 下岡、前掲論文(注17に同じ)、二六頁

(23) たとえば、安藤宏は「明治三〇年代後半から大正半ばにかけてのこの一〇年間は、同時に日本の近代文学の黄金期―空前の収穫期―でもありました」とし、「近代文学を代表する作家たちが、その生涯の代表作のかなりの部分をこの時期に書いている」ことを指摘している(テキストの中の「文壇―近代文学の〈共同性〉」東京大学文学部国文学研究室編『講義日本文学―〈共同性〉からの視界』東京大学出版会、二〇二二・三、一三五頁)。

(24) なお、「神経衰弱兼麻刺里亜」という罹病は退職金受給のための口実であった可能性も存する。台湾総督府公文類纂を精査した栗原純「日本による台湾植民地統治とマリアー」(『台湾総督府公文類纂』を中心として)、『社会科学研究』第27巻第2号(通巻第52号)、二〇〇七・三)では、「マリアーが台湾を表象する伝染病であることは、マリアーを口実にして辞職する総督府職員を生み出し」、「診断書が条件を満たし、病名にマリアーと記されていたとしても、必ずしも真因ではない事例がみられる」(二五二―二五三頁)ことが指摘されている。同様の旨を、やまだあつし氏からも直接ご教示頂いた。

(25) 大橋、前掲書(注1に同じ)に拠れば、台湾支部はその会員数を雑誌創刊時(一九〇八年)の二八五九二人から、廃刊前年(一九一五年)の七八五九六人へと大幅に増やした(二一六頁)。一方、雑誌が生み出した赤

字は「大正三年末雑誌代取入未済額 七二〇〇円・七一八、同四年末雑誌代取入未済額（大正五年度繰越）八九〇五円・〇二三」のほり、「広告料の未収入も亦相当の数字を免れない」（二四九頁）とある。

(26) 出席については「柏中同窓会東京支部会報告ノ追補」（『御大典奉祝三〇周年記念号』兵庫県立柏原中学校校友会・同窓会、一九二八・一二）九四頁の記載に拠る。住所は同上書名簿（二頁）「第三回（37名）明治三十七年卒業」  
「加納（武田）豊」より引用

(27) その他、『田健治郎日記』第四卷（芙蓉書房出版、二〇一四・九）一九一八年八月一三日来訪者に「加納豊」の名が確認できる（一〇八頁）。翻刻には「加納豊（田氏）」とあるが、正しくは「加納豊（国民）」と考えられ、同時期の「国民新聞社社員名簿」（一九一七年二月）にも「加納豊」の記載が確認できる（財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団編『民友社思想文学叢書別巻 徳富蘇峰記念館所蔵民友社関係資料集』三一書房、一九八五・五、二二頁）。また、一九三三年一〇月三日、八日付『台南新報』に加納が関東大震災を記録した活動写真を放映したという記事もあるが（台湾電影史研究史料資料庫 <http://tw.indiana.edu/>、参照）、以上の点については、いずれも本人である確証は得られていない。よって、現時点ではあくまで記載の事実の指摘にとどめておく。

(28) 荒木氏は『忍と力と』『破戒』のモデル 大江礪吉の生涯（富士精版印刷、一九九六・一）、『破戒』のモデル 大江礪吉の生涯（解放出版社、一九九六・一二）の執筆にあたり、旧制柏原中学校に関する多くの資料を収集されているが、その中の一つに加納の死亡時期に関する記述があるという。ただし、奥付のない複写資料のため、典拠は不明。その他、柏原中学校については『創立六〇周年記念誌』（兵庫県立柏原高等学校、一九五七・三）、兵庫県立柏原高等学校記念誌編集委員『創立七〇周年記念誌』（兵庫県立柏原高等学校、一九六七・七）、柏原高校百年史編集委員

会『柏原高校百年史』（兵庫県立柏原高等学校百周年記念事業実行委員会、一九九七・四）参照

また、日本大学文学部図書館所蔵の兵庫県立柏原高等学校柏陵同窓会編『会員名簿 昭和二八年一〇月現在』『会員名簿 昭和三七年三月現在』（柏陵同窓会、一九五三年）のいずれにも「死亡者」の欄に加納豊の名が確認されるが、死亡時期については記載なし。右については、日本大学図書館文学部分館レファレンス係・齊藤氏の教示に基づく。

(29) 明顕寺（丹波市柏原町）過去帳に基づく教示による。墓石にも同様の没年記載を確認した。ただし、父・豊については同寺の過去帳にも記載なし。加納家については、滝川秀行氏の教示により、松井拳堂編『柏原町志』（丹波新聞社、一九五五・二）、松井拳堂『丹波人物志』（丹波人物志）「増訂丹波史年表」刊行会、一九六〇・一〇）参照

(30) 加納ユカシ（幽閑子）には、『台湾愛国婦人』以外にも一九〇六年から一九三五年に渡って複数の媒体に署名入りの記事、作品が確認される。彼女は一九〇九年一月から一九二三年七月まで愛国婦人会台湾支部事務員（後嘱託）として雇用されている（大橋捨三郎、前掲書（注1に同じ）七三二頁）が、『東京二六新聞』（一九〇八年六月九日、一〇日）の投稿記事「月取三〇円の生活法」には「私どもの主人は、市の小学校に職を奉じて」おり、一〇歳の娘と五歳の男の子がいと書かれている。ユカシは加納豊と同時期に『家庭雑誌』『台湾愛国婦人』へ寄稿を行っているが、この投稿記事の内容が本人の家庭に基づく事実であれば、彼女は少なくとも豊の妻ではない。

大橋、前掲書（注1に同じ）には「二月二六日雑誌部の廃止と共に関係職員加納、荒木、福迫其の他全部を解職した」（二五〇頁）とあり、それぞれ加納豊、荒木栄直、福迫亀太郎（在京記者、筆名…佳橋、歌橋）を指すと考えられる。

【付記】本稿は現代台湾研究学術討論会、台湾史研究会七月例会（二〇二〇年一〇月四日、二〇二二年七月一八日、いずれもオンライン開催）における口頭発表を加筆修正したものである。コメントーターの宮崎聖子氏や、まだあつし氏をはじめとする台湾史研究会の皆様、並びに栗原純氏から貴重な教示を頂きました。

加納豊の履歴調査においては柏原高等学校元教諭・荒木謙氏、兵庫県立柏原高等学校柏陵同窓会事務局・萩野朋子氏、同会長・竹内牧人氏、丹波市文化財研究会会長・竹内脩氏に、加納家菩提寺の特定においては西薬寺（柏原町）滝川秀行住職、西念寺（丹波市氷上町）亀山住職、並びに明顯寺の廣崎秀行住職、廣崎香氏、廣崎玉江氏にご厚情を賜りました。ここに記して御礼申し上げます。

本稿は、JSPS 科研費 JP21K00265 の助成を受けた研究成果の一部です。

【加納豊著作一覧表】※目次と本文のタイトルが異なる場合には、本文の方を採用した。加納の履歴書記載の『学生タイムス』（学生タイムス社、一九〇五年七月～一九〇八年四月）は「来れ！本誌は男女学生唯一の良友にして又無二の機関紙なり」とうたわれている新聞であるが、加納の署名入り記事は確認できなかった。『台湾愛国婦人』読者投稿欄での応答や記述については省略した。

発表年月日	筆名	タイトル(ジャンル)	発表誌
1908.1.10	紫峯生	「学生論客月旦」	『中学世界』第11巻第1号
1908.2.10	紫峯生	「学生論客月旦」	『中学世界』第11巻第2号
1908.3.10	紫峯生	「学生論客月旦」	『中学世界』第11巻第3号
1908.6.1	抱夢庵	「夢歌」(小説)	『家庭雑誌』41年6月号
1908.6.10	紫峯生	「雄弁界の異彩」(高弁論部)	『中学世界』第11巻第7号
1908.7.1	抱夢庵	「踏絵」(小説)	『家庭雑誌』41年7月号
1908.7.10	紫峯生	「向陵論客月旦」	『中学世界』第11巻第9号
1908.9.1	ゆめいたくひと	「弱き人」(小説)	『家庭雑誌』41年9月号
1908.10.1	抱夢庵	「粉屋の娘」(をさな草紙)	『家庭雑誌』41年10月号
1908.10.1	今抱夢	「黒真珠」(短歌)	『家庭雑誌』41年10月号
1908.10.1	今抱夢	「駒鳥」(小説)	『家庭雑誌』41年10月号
1908.11.1	今抱夢	「粉屋の娘」(をさな草紙)	『家庭雑誌』41年11月号
1908.11.20	加納紫峯	「天」(短歌)	『中学世界』第11巻第15号

1914・10・1			「太魯閣蕃討伐記」	『台湾愛国婦人』第71卷
1914・9・1			「太魯閣蕃討伐記」	『台湾愛国婦人』第70卷
1914・8・1			「太魯閣蕃討伐記」	『台湾愛国婦人』第69卷
1914・7・1	抱夢庵主人		「太魯閣蕃討伐記」	『台湾愛国婦人』第68卷
1911・5・1	告天子		「上靴の王妃」(翻案お伽劇)	『台湾愛国婦人』第30卷
1911・1・1	告天子		「附録 討蕃双六に就て」	『台湾愛国婦人』第26卷
1910・6・15	加納告天子		「皇后と瀕死の少女」(雜録)	『台湾愛国婦人』第19卷
1910・4・15	告天子		「徂春の曲」(小説)	『台湾愛国婦人』第17卷
1910・3・15	告天子		「徂春の曲」(小説)	『台湾愛国婦人』第16卷
1910・2・15	加納告天子		「徂春の曲」(小説)	『台湾愛国婦人』第15卷
1910・1・15	加納告天子		「徂春の曲」(小説)	『台湾愛国婦人』第14卷
1909・12・15	加納告天子		「徂春の曲」(小説)	『台湾愛国婦人』第13卷
1909・11・15	加納告天子		「徂春の曲」(小説)	『台湾愛国婦人』第12卷
1909・10・15	告天子		「徂春の曲」(小説)	『台湾愛国婦人』第11卷

1915・12・1	加納抱夢		「夢」(小説)	『台湾愛国婦人』第85卷
1915・11・1	加納抱夢		「夢」(小説)	『台湾愛国婦人』第84卷
1915・10・1	加納抱夢		「夢」(小説)	『台湾愛国婦人』第83卷
1915・9・1	加納抱夢		「夢」(小説)	『台湾愛国婦人』第82卷
1915・8・1	加納抱夢		「夢」(小説)	『台湾愛国婦人』第81卷
1915・7・1	加納抱夢		「夢」(小説)	『台湾愛国婦人』第80卷
1915・6・1	加納抱夢		「夢」(小説)	『台湾愛国婦人』第79卷
1915・5・1	加納抱夢		「夢」(小説)	『台湾愛国婦人』第78卷

—しもおか・ゆか、広島大学大学院人間社会科学部研究科准教授—